

青年期におけるきょうだい関係と友人関係

Sibling Relationships and Friend Relationships among Junior High School Children, High School Students, and University Students.

磯崎 三喜年 ISOZAKI, Mikitoshi

● 国際基督教大学
International Christian University

Keywords 三人きょうだい関係, 友人関係, 親密さ, 自己評価維持

three-sibling relationships, friend relationships, intimacy, self-evaluation maintenance

ABSTRACT

本研究は、年上・年下、性および年齢段階が、きょうだい関係と友人関係に及ぼす効果について検討した。参加者は、日本の公立中学校の生徒 247 名(男 122 名, 女 125 名), 公立高校の生徒 136 名(男 87 名, 女 49 名) および大学生 14 名(男 3 名, 女 11 名) であり、三人きょうだいのいる人を対象に、質問紙調査を実施した。年上・年下、性、年齢差(3歳未満と3歳以上)、年齢段階の多変量分散分析の結果、年上・年下、性、年齢段階の主効果が有意となった。年上のきょうだいは、自己にとって関与度の高い教科で、年下のきょうだいよりも自己を優位に知覚していた。年齢段階が上がるほど、関与度の高い教科で自己をきょうだいや友人より高く評定し、きょうだい関係もより肯定的であった。他方、友達づきあいのよさは、年齢段階が上の回答者の方が、友人を自己よりも高く評定していた。これらの結果は、きょうだい関係と友人関係との間に、自己評価維持の視点から密接な関連があることを示唆している。

The effects of older-younger siblings, sex, and age level on the cognition of sibling relationships and friend relationships were examined. Participants were 247 (122 male, 125 female) Japanese public junior high school children, 136 (87 male, 49 female) Japanese public high school students, and 14 (3 male, 11 female) Japanese private university students. Questionnaires were administered to individuals belonging to families consisting of three siblings. Participants responded to various items related to their sibling relationships and friend relationships. In addition, each participant was asked to answer the following questions: "How successful are you compared to your brother/sister (close friend) in the following things: being good at sports, artistic ability, performing well on a highly self-relevant subject?" Participants rated each of these items using a 5-point scale (1: my sibling is far more successful ~ 5: I am far more successful). Data were analyzed using the MANOVA procedure (older-younger, sex, age difference: below

3 vs. above 3, and age level: junior high school, high school, university). The results showed that the main effects of older-younger, sex, and age level were statistically significant (using Wilks' Lambda). An interaction effect between age difference, sex, and age level was also found (using Wilks' Lambda). Older-sibling respondents rated themselves better than their younger siblings on a highly self-relevant subject. Respondents rated themselves better than their siblings and their friends on a highly self-relevant subject as they grew up, and their sibling relationships were positive. On the other hand, respondents rated themselves worse than their friends on sociability as they grew up. Implications of these results for enhanced understanding of the nature of relationships between siblings and friends in terms of self-evaluation maintenance were suggested.

1. 問題

きょうだいは、家族という緊密な関係の中で互いを意識し、さまざまなやり取りをしながら影響を受けたり与えたりする。また、類似と非類似、親密さと葛藤の入り混じった存在でもある。あるときは、相互に助け合い、そのよさを感じつつも、きょうだいの存在によって自己の欲求が阻害されることや、反目し合うこともある。いずれにせよ、きょうだい関係は、社会化の過程において重要な役割を果たし、個人の適応やその行動様式と密接に関わっている。

多くの場合、きょうだいの存在は、非選択的に決定される。きょうだい相互の関係は多様であるが、そうした関わり方の如何にかかわらず、ある種の強いつながりが、親子やきょうだいの間にはすでに存在している。

また、その一方で、きょうだい関係は、長期にわたる関わり合いと影響の授受を経て次第に変化し、成長の各段階において、さまざまな様相をみせる。つまり、きょうだい関係は、非選択的に決定された「所与のもの」でありながら、長期にわたって「作り上げられるもの」でもある。

こうした成長の過程におけるきょうだい間の変化を見ることは、きょうだい関係のもつ意味を考える上でも興味深い。また、その過程で、子どもは、自他の特性を把握し、社会的な適応を図っていく。

自己は、まさにこうした身近な他者とのやり

とりの中で形成される。その過程において、特に重要な役割を果たすのが、親子関係やきょうだい関係を中心とした家族関係である。

きょうだい関係については、就学前の子どもを対象とした、Dunn (1983) や、小・中学生を対象とした塩田・大橋 (1958) などの研究、さらには、Manaster & Corsini (1982) による、第二子は第一子が弱い分野で頭角を現そうとするとの指摘など、いくつか興味深い知見が提出されている。

ただし、我が国の家族関係の実証的研究においては、親子関係や夫婦関係と比較して、きょうだい関係の研究は少ないとされている (白佐, 2006)。また、白佐 (2004) は、きょうだい同士の関係は、幼少期から高齢期まで発達的に変化し、発達段階の各時期において異なった関係を形成すると想定されるとし、これらの変化のプロセスや各段階の特徴を明らかにするような研究は、まだほとんどなされていないと指摘している。

きょうだいが互いの存在を肯定し、好ましい関係を築くには、成長に伴う心理的成熟が必要となる。中学生から大学生を対象とした研究 (磯崎, 2007) では、年齢段階が上がるにつれて、きょうだい関係の認知はより好ましいものとなっている。また、年下のきょうだいが、そして男子より女子の方が、きょうだいの存在を肯定的に捉えている。年上のきょうだいは、年下のきょうだいに対し距離をおきがちであるのに対し、年

下のきょうだいは、年上のきょうだいを自己に近づけて捉えようとする。

このように、きょうだいは、出生順位、性別、そして発達段階など、多様な要因によって、きょうだい関係に変化がみられ、こうした変化の背景をなす統一的な視点からの説明が必要となっている。

こうしたきょうだい間の関係は、友人関係や友人の選択にも影響を与えていると思われる。もちろん、その方向は、一方向的なものではなく、友人選択や友人関係が、きょうだいのあり方にも影響を与えると推測される。

成長に伴い、親やきょうだい相互のやりとりだけでなく、近隣の仲間との関係や友人関係を形成し、親やきょうだいとの関係とはまた別の世界を作り上げていく。つまり、友人関係などのより多様な関係を築きつつ、親やきょうだいとの関係を再構築していく存在でもある。その意味では、そうした成長と社会化の過程において、きょうだいに対する捉え方とあわせ、友人関係に対する捉え方も同時にみていく必要がある。

自己と友人やきょうだいに対する評価に関して、Tesser (1980) や Tesser (1984) は、自己評価維持 (self-evaluation maintenance: SEM) モデルによって、興味深い視点を提供している。このモデルの論点をなす自己評価維持が可能なきょうだい関係、友人関係は、それだけより好ましい対人関係を形成していると考えられる。

また、それを発展させた Beach & Tesser (1995) の拡張自己評価維持 (extended self-evaluation maintenance: ESEM) モデルの考え方も、より親密な対人関係を考察する上で、重要な論点を提出している。

本研究で、きょうだい関係と友人関係の双方を同時的に取り上げるのも、こうした理論モデルを暗黙のうちに想定しているからである。

小・中学生の友人関係を扱った研究においては、学業成績と友人関係との間に、自己評価維持から予測される関係が見られる (例えば、磯崎・高橋, 1988, 1993 など)。

年齢段階が上がるほど、きょうだい関係は、

より好ましいものとなるが、それと対応してきょうだい関係と友人関係の間にも、何らかの関連があるように思われる。

きょうだいの年上・年下の間では、必ずしも自己評価維持の予測に合致した結果が得られているわけではない。むしろ、長幼の序的傾向が示され、年上が年下に対し優位な状態にある (磯崎, 2007)。また、年下のきょうだいもそれを認める傾向にある。この研究は、主に二人きょうだいを対象にしたものであるが、こうした傾向は、特に年齢段階の低い子どもに見られる。

年齢段階が上がると、人は、きょうだいあるいは親密な関係にある友人との間で、それぞれ優位な側面を見出し、それを変化させて互いに調整を図る可能性がある。例えば、知的側面で年上のきょうだいが優位であれば、スポーツの側面で、年下のきょうだいが優位性を示すことなどが考えられる。また、中学から高校、さらには、大学などの年齢段階にある個人は、きょうだい関係だけでなく、友人関係の重みも増してくる。

きょうだい間あるいは友人関係のバランスは、それぞれ同じような形で成立するのか、あるいは、異なった様相を呈するのか興味深い問題である。年齢段階が上がるほど、それぞれ固有の領域を見出しやすく、自己評価の維持もなされやすいと考えられる。また、これまで主として二人きょうだいを対象としてきたが、三人きょうだいについても検討する必要がある。

したがって、ここでは、こうした自己評価維持的機制的視点から、中学生、高校生、大学生の三人きょうだいを対象に、きょうだい関係と友人関係およびその相互の関連について検討を行うことにする。

2. 方法

2.1 調査対象者 中学生は、公立の中学校1年生から3年生であり、三人きょうだいのいる247名 (男:122名, 女:125名) を対象とした。高校生は、公立の高校生1, 2年生で、三人きょうだいのいる136名 (男:87名, 女:49名) を対

象とした。また、三人きょうだいのいる私立大学生14名(男:3名,女:11名)にも調査を行った。

2.2 質問項目 まず、回答者の属性(性、年齢など)ときょうだいの人数、そして回答者自身がその何番目にあたるかを尋ねた。そして、三人きょうだいのうち、自分に年齢の近いきょうだいを選んで、きょうだいとの関係や自己ときょうだいに対する評定を求めた。なお、回答者自身が三人きょうだいの二番目で、年齢差が同じきょうだいがある場合は、いずれかのきょうだいを任意に選んで回答させた。また、友人については、最も一緒にいたいと思う友人を一人思い浮かべてもらい、その友人との関係、自己と友人に対する評定項目に回答を求めた。

質問項目は、大きく分けて、きょうだい関係に関する項目、自己ときょうだいに対する評定に関する項目、友人関係に関する項目、自己と友人に対する評定に関する項目から成っていた。

まず、きょうだい関係に関する項目は、以下のとおりであった。①一人っ子は気楽だと思う、②困ったことがあったとき、さびしいときなど、いっしょにいたいと思う、③きょうだいがいてよかったと思う、④自分の上にもっときょうだいがいたらよかったと思う、⑤自分の下に、もっときょうだいがいたらよかったと思う、⑥あなたとそのきょうだいは、考え方やものの見方がよく似ている、⑦そのきょうだいのすばらしさをときどき感じる、⑧そのきょうだいの手助けをときどきする、⑨そのきょうだいにときどき助けてもらう、⑩そのきょうだいが好きだ、⑪そのきょうだいにときどき相談することがある。これらの項目にどの程度あてはまると思うか、5段階評定(「1:あてはまらない」から「5:あてはまる」)を求めた。

自己ときょうだいに対する評定に関する項目は、以下のとおりであった。なお、これらの項目のいくつかについては、回答者にとってどの程度重要であるかについても併せて回答を求めた。①どちらが友だちづきあいが良いと思うか、②運動(スポーツ)がよくできる、③スポーツの重要性、④最も得意な運動のできぐあい、⑤

最も得意な教科の重要性、⑥最も得意な教科のできぐあい、⑦最も苦手な教科のできぐあい、⑧最も得意な芸術の重要性、⑨最も得意な芸術のできぐあい、⑩最も苦手な芸術のできぐあい、⑪最も大事なことがらのできぐあい。

自己ときょうだいに対する評定については、「1:きょうだいの方がよくできる」から「5:自分の方がよくできる」までの5段階評定を求めた。「3」は、尺度の中間値であり、この値を超えるほど、自分を高く評定していることになる。同様に、重要性についても5段階評定(「1:まったく重要でない」から「5:非常に重要である」)を求めた。

友人関係に関する項目は、以下のとおりであった。①考え方やものの見方が似ている、②友人のすばらしさを感じる、③友人の手助けをときどきする、④友人にときどき助けてもらう、⑤友人が好きだ、⑥友人にときどき相談する。これらの項目にどの程度あてはまると思うか、5段階評定(「1:あてはまらない」から「5:あてはまる」)を求めた。

自己と友人に対する評定に関する項目は以下のとおりであった。①どちらが友だちづきあいが良いと思うか、②友だちづきあいの重要性、③運動(スポーツ)がよくできる、④最も得意な運動のできぐあい、⑤最も得意な教科のできぐあい、⑥最も苦手な教科のできぐあい、⑦最も得意な芸術のできぐあい、⑧最も苦手な芸術のできぐあい、⑨最も大事なことがらのできぐあい。自己と友人に対する評定については、「1:友人の方がよくできる」から「5:自分の方がよくできる」までの5段階評定を求めた。同様に、重要性の項目についても、5段階評定(「1:まったく重要でない」から「5:非常に重要である」)を求めた。

2.3 手続き 中学校、高校、大学いずれもクラスごとと集団で一斉に質問紙を配布し、回答を得た。ただし、時間の関係で、回答が困難な場合は、後日回収を行った。

3. 結果

きょうだい関係、自己ときょうだいに対する評定、友人関係などについて、年上・年下、年齢段階（中学生、高校生、大学生）、きょうだい間の年齢差（3歳未満、3歳以上）、回答者の性（男子、女子）の多変量分散分析を行った。その結果、年上・年下 ($F(38, 246)=1.97, p<.01, \text{Wilks' Lambda}=.77$)、年齢段階 ($F(76, 492)=1.76, p<.001, \text{Wilks' Lambda}=.62$)、回答者の性 ($F(38, 246)=2.47, p<.001, \text{Wilks' Lambda}=.73$) の主効果が有意となった。年齢差の主効果は見られなかった。また、年齢差と年齢段階および回答者の性の交互作用 ($F(76, 492)=1.67, p<.01, \text{Wilks' Lambda}=.63$) が有意となった。

以下は、それぞれ有意となった項目について、一変量分散分析の結果と共に示した。

3.1 年上・年下別にみた結果

年上・年下別にみたきょうだい関係の認知と一変量分散分析の結果（F値）を表1に示した。

表1 年上・年下別にみたきょうだい関係認知の平均値（標準誤差）

	年上	年下	F 値
自分の上に、もっときょうだいがいたらよかった	3.83 (.22)	2.08 (.21)	33.54 ***
きょうだいに相談する	2.24 (.22)	2.95 (.21)	5.31 *

注：数値は推定周辺平均を示す

*** $p<.001$, * $p<.05$

年上は、自分の上にきょうだいがいたらよかったと思う度合いが強い。自分の下にきょうだいがいたらよかったと思う度合いは、年上と年下で変わらない。

また、年下は年上よりも、きょうだいに相談する度合いが、相対的に高い。

次に、年上・年下別にみた自己ときょうだい

に対する評定結果を表2に示した。

得意教科のできぐあい、得意な芸術のできぐあい、いずれも年上のきょうだいの方が、年下よりも自己評定が高い。

表2 年上・年下別にみた自己ときょうだいに対する評定の平均値（標準誤差）

	年上	年下	F 値
得意教科のできぐあい	4.40 (.21)	3.69 (.20)	6.05 *
得意な芸術のできぐあい	3.96 (.21)	2.72 (.20)	18.05 ***

注：数値は推定周辺平均を示す

*** $p<.001$, * $p<.05$

3.2 年齢段階別にみた結果

表3に、年齢段階別にみたきょうだい関係認知の結果を示した。

中学生や高校生よりも、大学生が自分の下にもっときょうだいがいたらよかったと答えている。また、中学生や高校生よりも大学生の方が、きょうだいのすばらしさを感じ、きょうだいが好きと答えている。

表3 年齢段階別にみたきょうだい関係認知の平均値（標準誤差）

	中学	高校	大学	F 値
自分の下に、もっときょうだいがいたらよかった	2.53(.10) ^a	2.68(.16) ^a	4.14(.46) ^b	6.04 **
きょうだいのすばらしさを感じる	2.89(.09) ^a	2.95(.14) ^a	4.51(.42) ^b	7.34 **
きょうだいが好き	3.22(.09) ^a	3.19(.14) ^a	4.40(.41) ^b	4.08 *

注1：数値は推定周辺平均を示す

** $p<.01$, * $p<.05$

注2：異なるサブスクリプト間に有意差があることを示す

表4に、年齢段階別にみた自己ときょうだいに対する評価結果を示した。

表4 年齢段階別にみた自己ときょうだいに対する評価の平均値（標準誤差）

中学	高校	大学	F 値
3.52(09) ^a	3.01(14) ^b	3.40(42) ^{ab}	4.56 *
3.56(10) ^a	4.03(15) ^b	4.57(43) ^{ab}	5.60 *

注1：数値は推定周辺平均を示す * $p < .05$

注2：異なるサブスクリプト間に有意差があることを示す

得意教科のできぐあいにおいて、高校生は中学生より、きょうだいと比べた自己評価が高くなっている。逆に、スポーツの重要性では、高校生より中学生の評価の方が高くなっている。

表5に、年齢段階別にみた自己と友人に対する評価結果を示した。

表5 年齢段階別にみた自己と友人に対する評価の平均値（標準誤差）

中学	高校	大学	F 値
2.61(08) ^a	2.38(12) ^{ab}	1.70(36) ^b	3.95 *
3.13(10) ^a	3.76(16) ^b	4.29(47) ^b	7.46 **

注1：数値は推定周辺平均を示す

** $p < .01$, * $p < .05$

注2：異なるサブスクリプト間に有意差があることを示す

友達づきあいのよさは、年齢段階が上になるほど自己評価が下がり、友人を自己よりも高く評価している。また、高校生や大学生は、得意教科のできぐあいにおいて、自己を友人よりも高く評価している。

表6 性別にみたきょうだい関係認知の平均値（標準誤差）

男子	女子	F 値
3.30 (.20)	4.10 (.19)	8.24 **
2.57(.22)	3.23(.21)	4.78 *
3.02(.20)	3.71(.19)	6.07 *
3.26(.20)	3.86(.19)	4.73 *

注：数値は推定周辺平均を示す

** $p < .01$, * $p < .05$

表7 性別にみた自己ときょうだいに対する評価の平均値（標準誤差）

男子	女子	F 値
3.25(.23)	2.39(.21)	7.39 **
3.69(.21)	2.95(.19)	7.02 **
4.51(.21)	3.57(.20)	10.70 **
2.75(.20)	3.88(.19)	16.84 ***
2.74(.22)	3.84(.20)	14.08 ***
2.08(.20)	2.80(.19)	6.88 **

注：数値は推定周辺平均を示す

*** $p < .001$, ** $p < .01$

3.3 性別にみた結果

表6に、性別にみたきょうだい関係認知の結果を示した。

困った時、いっしょにいたい、自分の上にきょうだいがいたらよかったとする度合いは、女子の方が男子より高い。また、きょうだいに助けをもらう、きょうだいが好きという度合いも、女

子の方が高い。

表7に、性別にみた自己ときょうだいに対する評定結果を示した。

男子は、女子よりも自己にとって得意なスポーツの重要性が高く、きょうだいと比べた得意なスポーツのできぐあいの評定も、女子より高い。これに対し、女子は、男子よりも自己にとって得意な芸術の重要性を高く評定し、きょうだいと比べたできぐあいの評定も、男子より高い。

表8に、性別にみた友人関係認知の結果を示した。

表8 性別にみた友人関係認知の平均値（標準誤差）

男子	女子	F 値
友人に助けをもらう		
4.00(15)	4.42(14)	4.14 *
友人が好きだ		
4.32(14)	4.82(13)	7.39 **
友人に相談する		
3.55(20)	4.36(18)	8.93 **

注：数値は推定周辺平均を示す

** $p < .01$, * $p < .05$

女子は、男子よりも友人に助けをもらう、あるいは友人に相談する度合いが高く、また友人を好きと評定している。

4. 考察

4.1 きょうだい関係の認知

年上・年下でみると、年下の方が、きょうだいに相談する度合いは相対的に高い。しかし、その他の項目では、年上・年下で大きな差は見られない。二人きょうだいでは、年下の方が、きょうだい関係をより肯定的に認知する傾向が見られている(磯崎, 2007)。その意味で、三人きょうだいは、二人きょうだいほど明確な、年上・年下の違いは見られなくなるように思われる。

性別では、女子が男子よりきょうだいの存在

を肯定しやすいことがわかる。また、女子の方が、きょうだいから援助を得ていると知覚している。

年齢段階別では、大学生段階で、きょうだいの存在を肯定的にとらえるようになっていくことがうかがえる。これは、年齢に伴う心理的な成長が関連していると思われる。また、その過程においてきょうだい間で棲み分けがなされてくると推測されるが、この点は、後にふれたい。

4.2 自己ときょうだいに対する評定

自己ときょうだいに対する評定において興味深いのは、得意なスポーツと得意な芸術のできぐあいが、男女の回答者で対照的なものとなっている点である。

つまり、得意なスポーツでは、男子の回答者は、きょうだいよりも自己の優位性を知覚している。これに対し、女子の回答者は、得意な芸術において、きょうだいよりも自己の優位性を知覚している。また、女子は、スポーツにおいて、男子は、苦手な芸術において、それぞれ自己の劣位性を認めている。

このように、きょうだい間で、男女は、それぞれ得意分野が異なっており、その意味づけ(自己にとっての重要性)も異なっている。これは、男女のきょうだい間である種の棲み分けやバランスが成立していることを示唆している。

こうした棲み分けやバランスは、きょうだい間に相互のよさを感じ取らせ、きょうだいの存在を肯定しやすい一因となっているように思われる。

年上・年下の点からみると、得意教科、得意な芸術いずれにおいても、年上が年下よりも自己を優位に知覚している。つまり、長幼の序的傾向を示す結果となっている。その意味で年上・年下間にバランスは見られない。

年齢段階別では、年齢段階とともに、得意な教科のできぐあいが高くなり、自己にとって関与度の高い教科で、自己肯定感を得ている様子がうかがえる。一般に、学年が上がるほど、得意な教科の重要性は増すことになる。したがって、そこでのできぐあいを高く評定することは、

きょうだい間であって、自己のよさを感じ取る大きな要因になっていると思われる。

4.3 友人関係の認知

性別にみると、女子が男子より友人関係をより親密に、肯定的に捉えている。これは、きょうだい関係と同様、女子の親和性の高さを示すものでもある。

4.4 自己と友人に対する評定

年齢段階別にみると、得意教科のできぐあいの評定において、年齢段階が上であるほど、友人と比べた自己評定が高くなっている。つまり、自己にとって関与度が高い教科では、自己が友人を上回っており、自己評価維持 (Tesser, 1984) の予測に即した結果となっている。

これは、自己ときょうだいに対する評定とほぼ対応した結果であり、自己評価維持的傾向が、友人関係、きょうだい関係いずれにおいても年齢段階が上であるほど強まることを示唆している。

しかも、年齢段階が上であるほど、友達づきあいのよさにおいては、友人の方が自己よりも友達づきあいがよいと評定し、友人のよさを積極的に肯定している。自己のよさを認めつつ、友人のよさをも積極的に認めていこうとする傾向が、年齢段階が上になるほど強まることうかがえる。

ここには、自己と友人との間に、ある種のバランスを取る心理が作用していると推測される。これは、磯崎 (2004) の関係性維持の心理を示唆するものでもある。

以上、本研究は、これまでのきょうだい関係の認知と自己の捉え方の視点に加え、友人関係と自己の問題も併せて検討した。その結果、三人きょうだいにおけるきょうだい関係において、年齢段階とともに、きょうだい関係の認知が好ましいものとなり、きょうだいの存在を肯定しやすいことが示された。

年齢段階が上がると、きょうだいのすばらしさを感じ、きょうだいへの好意が増加している

ことと考えあわせると、きょうだい間や友人間において自己評価維持がなされることが、きょうだい関係の好ましさと関連している可能性がうかがえる。

ただし、本研究は、大学生の参加者が少ないなどの問題もある。今後さらに、きょうだいや友人間でのバランスや棲み分けときょうだい関係、友人関係との関わりについて、より明確にしていく必要がある。

きょうだい関係と友人関係を、自己評価維持という枠組みから包括的に捉え、その相互関連をみたところに本研究の意義と独自性があるといえる。

引用文献

- Beach, S. R. H., & Tesser, A. (1995). Self-esteem and the extended self-evaluation maintenance model: The self in social context. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum Press, pp. 145-170.
- Dunn, J. (1983). Sibling relationships in early childhood. *Child Development*, 54, 787-811.
- 磯崎三喜年 (2004) 子ども社会研究の可能性: 子どもの心理学の立場から 子ども社会研究, 10, 25-30.
- 磯崎三喜年 (2007) 出生順位と性がきょうだい関係の認知と自己評価に及ぼす影響 社会科学ジャーナル, 67, COE 特別号, 203-220.
- 磯崎三喜年・高橋 超 (1988). 友人選択と学業成績における自己評価維持機制 心理学研究, 59, 113-119.
- 磯崎三喜年・高橋 超 (1993) 友人選択と学業成績の時系列的変化にみられる自己評価維持機制 心理学研究, 63, 371-378.
- Manaster, G. J., & Corsini, R. J. (1982) *Individual psychology: Theory and Practice*. F. E. Peacock Publishers. マナスター G. J. & コルシーニ R. J. 高尾利数・前田憲一 (訳) (1995) 現代アドラー心理学 上 春秋社
- 塩田芳久・大橋正夫 (1958). 同胞関係の心理学的研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要, 4, 101-107.
- 白佐俊憲 (2004). きょうだい関係とその関連領域の文献集成 III. 研究紹介編 川島書店
- 白佐俊憲 (2006). きょうだい研究の動向と課題 日本児童研究所 (編) 『児童心理学の進歩 2006 年版』金子書房 pp.57-84.
- Tesser, A. (1980). Self-esteem maintenance in

family dynamics. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 77-91.

Tesser, A. (1984). Self-evaluation maintenance processes: Implications for relationships and for development. In J. C. Masters & K. Yarkin-Levin(Eds.), *Boundary areas in Social and developmental psychology*. New York: Academic Press. pp.271-299.

本研究は、文部科学省によるICU21世紀COEプログラム「平和、安全、共生」(グループ代表 藤田英典教授)の補助を得て行われた。データ分析に協力いただいた小野寺孝義広島国際大学教授に感謝したい。